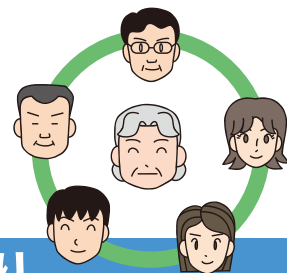


2 災害時要援護者にやさしいまちづくり

年齢や障害、言葉の壁などによって、災害発生時の対応に何らかの手助けが必要な人を災害時要援護者といいます。阪神・淡路大震災の犠牲者でもっとも多かったのは高齢者でした。災害時要援護者を守るために、地域が一丸となって取り組んでいきましょう。

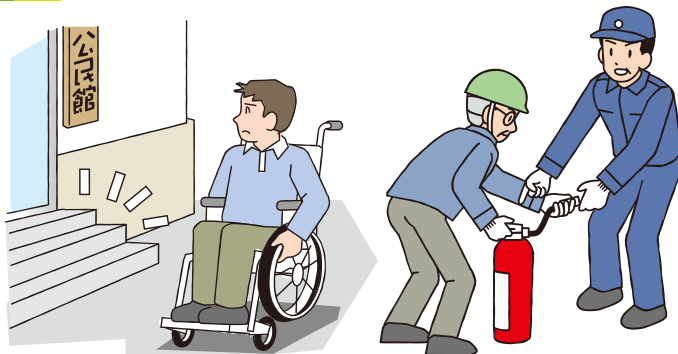


● 災害時要援護者が安心して暮らせる地域づくり

要援護者の身になって防災対策を

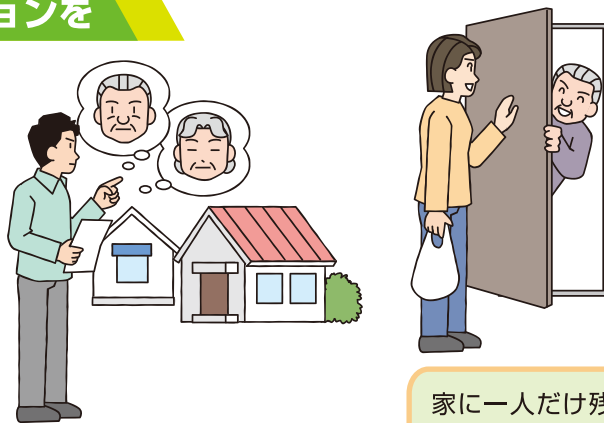
要援護者の人たちに対して、情報伝達の際にはどうやったら情報が正確に伝わるのか、避難誘導等を行う際にはどんな支障があるのかなど、要援護者の立場に立って考え、防災環境や防災体制を改善していきましょう。

そのためには、要援護者の方にも積極的に防災訓練に参加していただくことが大切です。



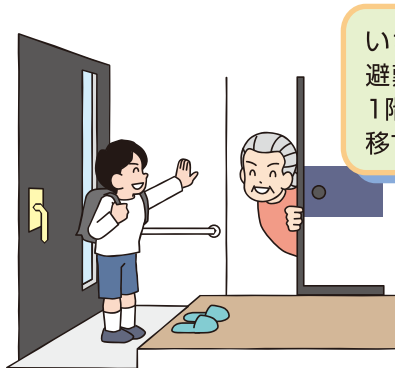
日ごろから地域でのコミュニケーションを

日常の支援活動こそが、要援護者対策そのものといってもいいでしょう。日ごろからコミュニケーションをもち、プライバシーや個人情報に配慮しつつ、地域ぐるみでの支援体制を整えましょう。



家庭の中での習慣づけを

家庭内のちょっとしたことで、要援護者対策はできるものです。また、隣近所の協力は不可欠ですから、普段のつき合いの中で相互理解を深めましょう。



いざというとき、すぐに避難・救助できるように1階の玄関付近に部屋を移す。



家の中の段差をなるべくなくす。



家に一人だけ残して出かけるときは、隣近所にひと声かけて。

● 要援護者を避難誘導する際のポイント

災害発生という非常時には、身体・言語に不自由のある人ほど、状況の変化に対してより大きな不安を抱くものです。そんなときこそ、思いやりの心で接し、その人の立場に立った支援を心がけましょう。



高齢者・傷病者

- 複数の人で対応。
- 緊急時には、おぶったり、担架を使ったりする。



目が不自由な人

- 杖を持つ手と反対側の肘のあたりに軽く触れ、ゆっくりと誘導。
- 誘導先の障害物や道路状況等を説明しながら進む。



耳が不自由な人

- 口を大きく動かし、はっきり、ゆっくり話す。
- 筆談、身ぶりなどで伝える。



外国人

- まずは身ぶり手ぶりで意思の疎通を図る。
- 外国語が分からないからといって、逃げてしまわないこと。孤立させないことが大切。



車いすの人

- 階段では二人以上で支援を。上りは前向き、下りは後向きで。
- 救援者が一人しかいないときは、おぶいひもを使って背負う。